

JECK Jica Expert Conference Kanagawa

JICA帰国専門家連絡会かながわ

第2号

JICA横浜国際センター（YIC）内にJECK活動拠点オープン

JICA横浜国際センター（YIC）のご好意によりYIC 3階の国際協力連絡室内に当会の活動拠点となるデスクや会議机等を設置してパーティションで区切ったスペースを整えて頂きました。パソコン等の事務機器は予算に合わせてこれから整備する予定です。YIC館内ではレストランの入り口の前、図書館の上に位置し、またデスク横の窓から外を眺めれば赤レンガ倉庫と大栈橋を見下ろすことになり、座っているだけで心が豊かになる場所となっています。残念ながら役員だけでは毎日詰めるだけの時間的、人員的余裕がありません。先般メーリングリストでもご連絡したように会員各位のボランティア的ご協力をお願いしていますが、当面の間、少なくとも毎週火曜日には役員が在席することとしています。是非ともお立ち寄りください。



当会スペースには、会員名簿や会計報告をはじめとする

JECK関係書類、YICからの定期刊物（JICA専門家情報誌FRONTIER他）や連絡情報、他都道府県の専門家連絡会会報等が揃っています。当面は情報交換、交流や会議、作業等の場として使っていきたいと考えています。また、同室内には神奈川県青年海外協力隊OB会、神奈川NGOネット、さらに財団法人横浜市国際交流協会のブースもあり、YICに宿泊している各国研修生の出入りもあってインターナショナルな雰囲気です。大いに活用するためにもみなさまと意見交換をしたいと考えています。



「あーすフェスタかながわ2003」に参加して

中之藪賢治代表幹事



「あーすフェスタかながわ2003」が5月10日と11日の2日間、横浜市栄区にある「あーすぶらざ」で開催されました。

この国際交流イベントは、多様な文化と価値観を持つ人びとが生きいきと暮らせる「多分化共生社会」の実現をめざし、神奈川県国際課が中心となって企画、運営するものです。今年で4回目を迎えたこのイベントは、外国籍住民やNGO団体、ボランティアの方々参加協力により開催するものです。

当連絡会にとってはじめての試みでしたが、JICAブースの中に参画し、会報創刊号を配布すると共に当会の紹介をしました。興味を持って立ち寄られる方から開発途上国などに対する質問がありましたが、今まで経験してきたことを説明しながら交流を図ることが出来ました。

また、民族衣装の展示と試着コーナーも設けられ、当会からも男性のフィリピンの伝統的シャツ、サウディ・アラビアの王族が着る民族衣装を提供しました。女性の民族衣装が多い中我々の男性衣装には多くの参加者が興味を持たれ、試着して写真を撮って楽しんでいました。松沢神奈川県知事も、サウディ・アラビアの民族衣装を試着され周りから大喝采をあげていました。

内容としては、室内外に分かれてブースがあり、室外ではテントの中で諸外国の料理が作られ販売していました。特にメキシコ、レバノン、ケニア、フィリピン料理には多くの参加者が列をなして料理を購入していました。その他にもNGO団体が日本の料理も提供していました。

2日間とも良い天気恵まれ、多くの一般市民の参加者がありました。来年は、当連絡会としても1つのブースを確保してこのイベントに参加する気運が盛り上がりました。皆様からのすばらしいアイデアを募集します。

花火を見ながら交流会

8月1日JICA横浜国際センター（YIC）で交流会が開催されました。今回の交流会は、横浜市保土ヶ谷区にある老人ホームからのお年寄りを招待して、センターに宿泊している外国人研修生とJICA職員、専門家連絡会、協力隊員OB会の有志が集まり、一緒に食事をしながら交流を図りました。研修員の中でも特に中南米の日系人学生は、積極的にお年寄りに話しかけるなど心温まる交流があり、印象的でした。

お年寄りから研修生に対して、日本独特の折り紙で作った飾り用の花が送られました。いただいた研修生は大変喜んで、家宝にすると話していました。

夜、7時15分になると横浜港からドドンという音と共に花火大会が始まりました。1時間15分と長丁場の花火大会でしたが、お年寄りや研修生は3階のテラスで熱心に花火を見ながらさらに交流を深めました。

終了後、来年も楽しみにしていますと言って帰られる方もいました。当連絡会としても交流活動の一環としてYICと連携を図りながらこのような交流会の継続を図っていこうと思います。



第2回総会報告

中之藪賢治代表幹事

いささか旧聞に属するが、平成15年4月12日(土) JICA横浜国際センター会議室において平成15年度総会(第2回総会)が開催された。ゲストにJICA, YICの萱島業務課長、金木課長代理をお招きし、出席会員18名、委任状多数を得て開催した。萱島課長からは「本会が神奈川の国際交流の一翼を担うようになる事を期待する」との御挨拶を頂いた。続いて出席会員の自己紹介ののち議事に入り

1. 平成14年度活動報告
2. 平成14年度会計決算報告
3. 平成15年度活動計画
4. 平成15年度会計予算

が上提され、原案どおり承認された。なお、これらの詳細については総会直後に全会員に(除く出席会員) 発送し報告に代えさせて頂いた。終了後YICレストランにおいて懇親会を開催し出席者全員の参加を得た。



第2回総会



萱島信子YIC業務課長のご挨拶

JECK拡大名簿作成

谷保茂樹事務局長

本年1月の発足時から2度の総会、懇親会を通じて、また会員との連絡の折々などに会員募集の不徹底さを多くの方からご指摘いただきました。現在の会員名簿は、準備期間であった平成14年度の神奈川県専門家派遣実績を元にして発起人が該当者に呼びかけ、同意をいただいた方に発足会への参加を案内し、その結果設立されたものです。それでも百名以上のご賛同をいただき、全国に40以上ある他都道府県の専門家連絡会と比べ規模的にも遜色がなく発足できたと関係者一同考えておりました。

その後、JICA本部派遣支援部が平成12年に作成した専門家名簿を入手したところ神奈川県だけで1,800名もの帰国専門家がリストアップされており、まさに発足会員は氷山の一角である事がわかりました。従来から首都圏における専門家連絡会は設立困難と言われて来たことを実感しました。今般、この名簿を元に、まだまだもれているとは思いますが、JECK拡大名簿を作成しました。新たに本会の存在を広報すべく連絡を開始しましたので、その結果は年末の会合時のお楽しみとして下さい。

「かながわNPOマネジメント・カレッジ2003」受講記

物部宏之監査役

NPOやNGOの活動については各方面から支援の手が差し伸べられているが、6月から7月にかけて神奈川県福祉事業協会と神奈川県遊技場協同組合の主催により5回にわたって「組織運営」「財源確保」についての実践講座があり、当会も参加を申し込み、役員の谷保と物部が手分けして出席した。

組織論としては「個人の経験を組織の力に変換」して経験を共有化し運営の高度化を図る、「企画力、事業計画力を高めるため」事業計画を手法にのっとりバランスよく立てる、「協力者を募り」感謝、報告を怠らない、といった事が参考になった。

「財源確保」については組織運営上のフリーハンドを確保するため自主財源(会費や事業報酬)を確保し、心構えとしては、「親戚知人にもPRするぐらいにのめりこんで」会員拡大を図り、拠出していただいた会費の意義ある使い方に対して報告をせよ、また、何に使うかについてはいつも概算数字を念頭に於いて活動せよと強調していた。参加者は30団体50名で、小は年度予算が数万円(地域の通学路清掃の会)から大は十億円以上(シャプラニール=市民による海外協力の会)まであり、当会の位置を確認するとともに、将来は法人化も視野に入れる事になるのではないかとの感を強くした。

今回の受講を契機に先ず会員拡大をはかるべく従来からの神奈川県帰国専門家約1800名に対して勧誘のアクションを起し始める事とした。また非公式役員会を都度開催し事業の展開、拡大の方策を探っている。JECK会員には省庁や大学、企業で長年活躍され、経験豊富な方も多い。今後その方達の経験が生かせるよう、会員に広く呼びかけ、できるだけ当事者として参加していただけるようにしたいと考えているのでよろしく願いする次第である。

南の風はアンコロンの調べを載せて

汐崎郁代会員

私は2001年11月から翌年2月初頭まで、JICAの初等理科教育プロジェクトの派遣専門家として、インドネシアのジャワ島に滞在した。バンドン、マラン、ジョグジャカルタの3都市にある教育大学を順に訪問、現地人の物理の先生方に日本から贈られた理科教育用実験機材の使い方を指導するという役目である。

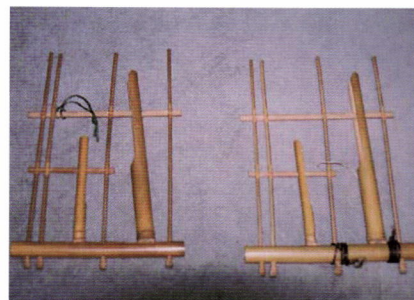
折しもニューヨークで自爆テロ騒動があった直後、「インドネシアはイスラム教国ではないか、行っても大丈夫か?くれぐれも気を付けろ」と友人たちが真顔で心配し、中には白山神社のお護りを贈って下さった方まであった。実際に現地入りしてみると、この国の人々の日常は柔和そのもの、ちょっと知り合えば人懐こく打ち明け話などして、物静かな笑顔を見せる。コーランの教えでは大声で罵り合うことも禁止されているようで、あるとき空港で見かけた光景は印象的であった。待合室の隅に二人の男がしゃがみこんで話しているうち、段々二人の声が大きくなり、やや声高に口論し始めたと見るや早速警察官がやってきて、二人を引き立てた。一人が、「なんでもないよ、話しているだけだ」と言い訳している様子だったが、有無を言わさず連行されて行ってしまった。私はこのとき、同じイスラムの教えである「眼には目を」と言う言葉を思い起こした。このように日常の争いを禁じられ、怒りを抑えて暮らしている人々だからこそ、耐え難い屈辱や大きな危害を受けたときだけは、復讐してもよい、と定められたのであろうかと。

仕事は相手のあることなので、現地の人々にはやや暖簾に腕押し之感があり、気ばかり忙しいわりに出来ることが少なくていささか肩透かしであった。そんな一日、プロジェクト本部のあるバンドン郊外の“Saung Udjo”という観光村を訪なう機会があったので、そのことを書かせて頂く。それは南アジアの民族文化を伝承するため、Mang Udjo 氏等が創始した学校兼歌劇団を形成する集落で、古くから用いられたアンコロンその他の民族楽器の演奏と舞踊劇を公開している。近年は現代音楽や外国の曲をも演奏できるように楽器を調整し、積極的な音楽活動を行っている。アンコロンは竹山道雄氏の「ビルマの竖琴」にも登場するし、派遣専門家ならずとも旧日本軍のアジア進出時代を生きた方々ならご存知とは思いますが、竹筒の端に孔を開け、竹の棒に数本通してぶらさげてあり、それを振ると各筒が横に渡した竹に当たって高低さまざまの音を出す仕組みだそう(菊池俊輔氏のホームページからとった図参照)。単純なものは1台で1音、ドならド、ミならミの音しか出ないので、各自にそれぞれの音程のものを持たせて大勢でメロディーを作っていく。Udjoでは幼児を含む子供たちが勉強しており、客の前で音楽や舞踊を披露して呉れる。ジャワ式の敷物の上に腰掛けて、澄んだ素朴な音色やエキゾチックなリズムにのんびり耳を傾けていると、プログラムの後半に至って幼い団員が観客一人一人にアンコロンを配り始めた。指揮者が自分の音を指示するたびにそれを振り鳴らせというのである。観客一人ひとりに付き添った童女(童子)にうながされてそれを振るうち、なにやら懐かしいメロディーが自分たちの手で作り出されていく。稚拙ながら数曲を演奏し終わったときは、一同感激である。最後は子供たちに舞台の真ん中に連れ出され、ダンスを踊らされる羽目になる。年齢とともに踊る機会など無くなってしまった私たちも、しまいにすっかり童心に帰らされ、楽しませてもらった。

有名なラーマヤナなどを見ても、日本の歌舞伎に通ずるところもあり、アジアの文化は我々の背景であると実感せざるを得なかった。



ジョグジャカルタ王宮の歴史物語の踊り手



菊池俊輔氏のホームページから



英語が上手でとても勤勉な秘書のティカさんの愛娘、インタン

任国あんなこと！こんなこと！ その1

●ラオス近況二題

(足立久美子会員)

1. 首都ビエンチャンでは交通手段はオートバイが一般的になりつつあります。朝は通勤ラッシュもところどころ出てきました。そのオートバイですが、老若男女(小学生ぐらいから)、3人/4人乗りで、乗り回している姿が見られます。ラオスの女性は、シンというラオス伝統のロングスカート姿で乗っている人もいますが、短いスカート・短パンも多くなっています。そして特に気になってしょうがないことは、ほとんどの女性に共通するのですがサンダル履きの姿で、しかもサンダルがハイヒールなのです。それでバイクに乗っている女性が多いので驚きます。上手いことクラッチペダルと足置き場(?)をハイヒールで操っています。もちろん事故も多いみたいです。
2. 夕方になるとちょっとした広場でエアロピクスをしているラオス人のグループが増えました。ここでは日本のような「室内」で、ということが可能な建物が無いのかどうか、ほとんどが屋外ですがいちおう屋根らしきものがあるところで行っています。スコールがきても大丈夫な場所です。健康ブームもあるせいか?若い人から年配の方まで特に女性が多いです。スタイルは、Tシャツにスパッツ・運動靴。リズムカルに踊っています。でも、その場所に来るために多くの人は、オートバイに乗ってきます。

●タイ タイ料理といえば激辛だが・・・(笹山弘会員)

タイ料理といえば辛い、それもとんでもなく辛い。というのが多くの方のイメージではないでしょうか。たしかに辛い料理が多いのですが、タイの人々が皆辛い料理を食べているわけではありません。子どもたちは全く辛い料理を食べていて、大きくなるにつれ、少しずつ辛いものに慣れさせていきます。大人でも、北部・東北部の人たちは激辛を好みますが、他の地方はそれほどありません。特に最近のバンコクの若い世代はむしろ辛いものを苦手にする人が増えています。他国の料理になれてきたせいだと思いますが、私のC/Pのひとりも辛いものが苦手。タイ料理の辛さに慣れてしまった私がいかに辛いと思う料理でも、「辛くて食べられない!」と泣いていました。ちなみに彼女は日本食が好きで、寿司とコンビニのおにぎりが好物。タイに唐辛子が根付いて百年ほど、残念ながらあと百年すると辛い料理が消えてしまうかもしれませんね。

任国あんなこと！こんなこと！ その2

●スリ・ランカの中古車と交通事情 (安延義弘会員)

1996年6月、スリ・ランカに派遣された時の事である。無事、首都コロomboに到着した翌日、60kmばかり離れたプロジェクト・サイトに向かう車の中から、物珍しそうに沿道の風景を眺めていたら、セブン・イレブンの運搬車が目に止まった。案内のスタッフに「スリ・ランカにもセブン・イレブンが在るんですね。」と声をかけたら、「いや、あれは車だけです。」との回答。変だなと思いつつ、それからプロジェクト・サイトの行き帰りに注意してみたら、なんと、コロombo周辺を走っている車の8割方は中古車で、その殆どが日本製であった。

これらの車が堂々と走れるのも、スリ・ランカには車検制度がないので、走りさえすれば、車体が凸凹であろうが、ランプが点かならうが、お構いなしである。

一応、交通規則はあり、たまに制限速度の表示が出ているが、おんほろバス、トラックから中古車にいたるまで、70、80km/hのスピードで突っ走ってくるので、狭い道での対面通行は命がけである。特に、見通しがよいと2車線の簡易舗装の道でも、すぐにスピードを出す。私が使っていたドライバーも例外でなかった。そんな訳で、日本では禁止されている内側追い越しは日常茶飯事で危険の上もない。そこでドライバーには内側追い越し禁止、スピードは60km/h以下と言いつつ、守られるのは一週間程度。だから、スピードを押さえろ、内側から追い越すなど注意するのが、口癖ようになっていた。通常は、大部分の車が前の車を追い越そうと右のウインカーを点けばなしで走るので、後続の車は右折するのかしないのかかわからないから、追突す前はしよちゅうである。そこで、本当に右折したい時は運転手が窓から手を出して合図し、追い越しても良い時も駄目な時も手で合図し、これが暗黙の交通ルールようになっていた。

●知っていますかドミニカ連邦国 (植岡龍太郎会員)

アメリカのフロリダ半島沖から南米のベネズエラ沖に至る東カリブ諸島のなかに、“ドミニカ”の名が付く島国が2つあることを知っていますか？北緯19度の同じ島の中でハイチと国境を接し、スペイン語を話し、日本人移民や広島カープの野球教室で有名な「ドミニカ共和国」と、それから約700キロ南に離れ北緯15度にあつてクレオール語や英語を話し、乗用車輸入以外には日本と交流の少ない「ドミニカ連邦国」です。

佐渡島より若干小さい「連邦国」の人口は7万人強と、192ある国連加盟国の中で少ない方から9番目です。同国は1978年の独立後も英連邦内にあるものの、生活文化面では歴史的にも両隣のフランス海外県島を通じクレオール文化の影響を強く受けています。火山隆起による険しい地形の同島は、発見者のコロンブスが今来ても見間違わないと云われるほど開発が遅れた緑色の山岳農業国です。花や野菜、根菜類、果物を周辺国に輸出し、食糧や日用品の殆どを輸入します。世界自然遺産の亜熱帯雨林が唯一の観光資源です。サンゴ礁はなく、狭い浜は黒砂か小石浜です。大型機発着用の飛行場造成用地がないため、観光客の多くは5～8万トンのカリブ周遊船で来て森林浴を楽しみます。誕生時に戸籍制度がなかったため世界一高齢者としてギネスブックへの登録が遅れている126歳の老女を初め、100歳以上の高齢者23人が健在であるなど長寿社会です。毎年襲来するハリケーンでバナナ生産量が大きく変動し、約200億円の国家予算も度々前年比半減します。地域通貨東カリブドルが米ドルに固定しているため、一人当たりGDPはUS\$3,600と高く、一般無償資金協力の対象外ですが、政府と国民は共に貧乏です。

●ウガンダ、アフリカの観光 (安食和博会員)

ウガンダは赤道上のアフリカ大陸のほぼ中心に位置し、標高1200メートルの首都カンパラは1年中温暖で季節変化がなく、大変過ごし易い所である。農業生産力も高くお茶の収穫などは年に最高36回も取れるぐらいに日差しが強く、雨が多い。そして緑に覆われた国土は、アフリカの真珠と言われるほどである。美しい自然に恵まれたこの国は観光として、西のコンゴの国境には有名なマウンテンゴリラの生息地があり、地溝帯の溝にできたアルバート湖、アフリカ最大の湖であるビクトリア湖、そこを源流とするナイル川など観光資源は豊富なのであるが、ゲリラ等により主要な観光地は立ち入ることができない状態にある。そこでウガンダに在住する人や日本から来る若い観光客は、安全な東部地域などのウガンダ人の儀式を見に行くことがはやっている。

その儀式は割礼である。12から13歳の男の子が6月ごろ村の広場で性器の皮を皆の前で切り取られるのであるが、村最大のイベントとして親戚一同、都会に移り住んだ者も戻ってきて参加する。大人への通過儀礼として重要なことであるが、村全体が興奮のつぼとなり、静かな村が大騒ぎとなる。切られる男の子たちは何日も寝ずに、この儀式のために、切られる恐怖心を超えるために、気持ちを集中し皆ハイの状態に陥っている。もし切られてから泣いたり痛がったりしたら、その子は一生弱虫の汚名を背負って生きなければならないため必死である。ほとんどの切られた子供たちは、嬉々として血の出ている先端を皆に示し、飛び回るのである。それを大騒ぎして村人が見るのであるが、その中に日本人の若い女の子が参加してその興奮を味わっている。

アフリカの観光とはこういうものなのかもしれない。

●タンザニア (安部信幸会員)

インド洋に面した経済首都ダル・エス・サラームからインド洋沿い南へ300km余にキルワ・マソコという小さな町がある。19世紀には奴隷貿易で発展した東アフリカ最大の都市国家が栄えていたという。現在はリンディ州キルワ県の県庁所在地である。雨季には横断する河川が氾濫して陸上交通が途絶え、民間会社の不定期便が唯一の交通手段となる。筆者もこの時期に足止めされ、次第に町中の燃料、電気(火力発電の燃料不足による)、電話(電力不足のため)、食料、水が欠乏したが、外部との連絡は警察無線だけとなり、一週間後にJICAの救援機で救出された経験がある。

マソコの沖合い2kmにキルワ・キシワニ島がある。1981年ユネスコの世界遺産に指定された世界最後の未開の巨大な王宮や砦など大遺跡がある島であるが、あまり世に知られていない。1331年にこの地を訪れたアラブ人のIbn Battoutaは「この町は世界の中でも最も美しく、計画だって整えられた都市の一つである」と三大洲周遊記に書き残している。かつてキルワは内陸よりザンベジ川の地域を通して奴隷、金、象牙、銅、鉄、ココナツなどを集め、インドやアラブに運ぶ貿易拠点として繁栄した。逆に東洋の文物、中国の磁器も多く持ち込まれたと見られ遺跡から発掘されている。キルワ・キシワニ島はいまだ未開であり、観光開発が待たれるところである

.....原稿を募集しています.....

会報第3号(H16年3月発行予定)に掲載する原稿【任国あんなこと！こんなこと！】を募集します。 ※400～500字程度

JICA帰国専門家連絡会かながわ会報 第2号

発行 2003年4月
 発行者 JICA帰国専門家連絡会かながわ (JECK)
 事務局 谷本 茂樹 (e-mail : Staniho@aol.com)
 横浜市青葉区青葉台1-3-9
 株式会社ティーエーネットワーク内

編集委員会 中之蘭賢治 (代表幹事) (e-mail : zvs04325@nifty.ne.jp)
 佐藤満寿哉、鈴木千明、物部宏之、谷本茂樹
 印刷 株式会社 横浜リテラ (URL : http://www.yokohamalitera.com/)
 (e-mail : litera@crocus.con.ne.jp)
 横浜市戸塚区上矢部町2039-2

平成15年度上半期役員会議事録要旨（議事録はYICの活動拠点にあります）

1. H15.4.7 17:00～19:00 YIC
 - ・平成14年度会計監査実施
 - ・平成15年度総会資料、運営次第の手順確認
 - ・JECKレター創刊号 グラブリ チェック
 - ・あーすフェスタかながわ2003参加について
2. H15.4.12 13:00～15:00 YIC
 - ・平成15年度総会開催
3. H15.4.28 17:00～19:00 YIC
 - ・JECKレター創刊号最終確認 JECKレター第2号準備について
 - ・あーすふえすた参加要領
 - ・NPOマネジメント講座 受講の件
4. H15.6.16 16:00～19:00 TA Networking Corp.
 - ・JECKレター第2号の内容打合せ
 - ・会費納入状況、新規入会者、脱会者の確認
 - ・あーすふえすた参加状況報告
5. H15.7.4 16:00～19:00 神奈川県民センター
 - ・NPOマネジメント講座受講終了の報告
 - ・JICA,YIC内3Fに活動拠点が正式にオープン 運営打合せ 報告はP1に記載
 - ・拡大名簿作成の件 報告はP2に記載
 - ・経理処理の中間確認
6. H15.7.30 16:00～19:00 YIC
 - ・拡大名簿作成と入会者募集方法の打合せ
 - ・横浜国際交流まつり参加 ブース確保
 - ・8月1日 花火大会へのボランティア参加について 報告はP1に記載
 - ・JECK活動規則原案についてディスカッション（経費は当面すべて自己負担）
7. H15.9.1 15:00～17:00 TA Networking Corp.
 - ・JECKレター第2号 原稿割付け実施
 - ・拡大名簿のエクセルへのインプット終了（約2000件）
 - ・国際交流まつりブース展示テーマについての検討
 - ・国際交流まつり参加PR文書作成（会員宛）
8. H15.9.27 11:00～17:00 YIC
 - ・JICAボランティア家族連絡会、及びJICAボランティア帰国報告会に出席
 - ・国際協力まつりの展示内容について
9. H15.9.29 16:00～18:00 YIC
 - ・JECKレター第2号の最終チェック
 - ・忘年会開催日程決定（H15.12.5）於YIC
セミナーを同時に開催：テーマについて検討

事務局便り

(1) JECKが登録した団体

当会は、発足してJICA横浜国際センター所管の専門家連絡会としてJICA本部国内事業部国内連携促進課に登録されていますが、さらに自主的に、神奈川県内の以下の団体にも団体登録をしました。今後連携して活動したいと考えています。また会員のみならずには各団体の活動、イベント情報また各種空間もご利用ください。

- ・財団法人 神奈川県国際交流協会
〒247-0007 横浜市栄区小管ケ谷1-2-1 神奈川県立地球市民かながわプラザ（あーすぶらざ）1階 Tel：045-896-2626
- ・財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE、ヨーク）
〒231-0023 横浜市中区山下町2 産貿センタービル9F Tel：045-671-7128
- ・神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 Tel：045-312-1121（交流サポート課）

(2) これからの主な予定

- 10月 「横浜国際協力まつり2003」への参加
- 10月 YIC「国際親善の集い」への参加
- 12月 専門家・プロジェクト活動発表会（含交流会）
- 3月 第三回会報発行

(3) 異動

当会の発足準備から発足まで大変お世話になりましたYICの福西賢治職員が9月1日付けでJICA東北支部へ異動されました。益々のご活躍をお祈りします。